

● 黒田畫伯とスコット大佐夫人

七年前の親しき友

北極好の送別馳走

既掲、悲惨なる探検家の寡婦と孤兒(二十日紙上)と題せる彼の南極の水晶郷裡の鬼と化せるスコット大佐未亡人に就て黒田清輝畫伯は語るやう

『自分の親しくした婦人はカルリーンと云つてロダンの弟子で彫刻を能くした其の良人はブルースと云つて畫家であつた。夫婦の交情は非常に好かつたが七年前夫人から良人ブ氏に逝かれたと云ふ通知があつたのみで夫人の行衛が判らなかつたから

▲ 歐洲に行く人毎に頼んで所在を捜して居た處が二十一日の東京日日新聞で見るとスコット大佐未亡人のカスリーンとカルリーンと唯だ一字の違いなのと其の容貌がよく似て居るのみか彫刻家とあるのと又スコット夫人なればカスリーン、スコットと云はねばならぬのをカスリーン、ブルースとあるのを見ても何うも

▲ 自分と親交があつた カルリーンではないかと思はれる節が多い併し今も云ふ通り夫婦情交が非常に好いばかりか相戀の間であつて其の當時巴里で美術家の妻と題せる小説が評判で夫れは孰れも家庭の悲惨なる事ばかりを書いたものであつたがブルース夫妻のは夫と大に異つて居ると

▲友人間の評判で あつた夫れと云ふのは相愛であるのと趣味は同じでも仕事が異なる處から晝間は各自別れに仕事場に於て製作に従事して夕方になつて立歸り晚餐を共にすると云ふ風で實に理想的の温かい家庭として人の羨む交情であつたから其の良人と別れて僅に二年にして再婚すると云ふ事は日本人から考へると

▲多少不審しき點 のないでもないが其處が外國人の性格の違ふ處と思へば又不思議もない夫れに夫人は常に北極の景色を嘆美して居たし去卅三年自分が歸朝する際送別の宴にも特に北極の馴鹿の料理で馳走して呉れた處などを思へば南極探検家に再婚した者之亦

▲縁のない話でも ない兎に角能く調査した上で若し夫がカルリンでありとすれば英國大使館の手を煩はしてなりと弔詞を送らねばならぬ』云々若し夫れ眞にスコット未亡人が畫伯に親交ありしとすれば世界の探検家と日本洋畫家の泰斗又婦人の彫刻家と對照して實に興味ある因縁と云ふべし

『東京日日新聞』大正二年三月三日

「悲惨なる探検家」とは、ノルウエーの探検家アムンゼンに次いで一九二二(大正元年)年に南極点到達を果したものの帰途遭難し、命を落としたイギリス海軍士官ロバート・スコット(Robert Scott)本文献は大正二年三月二〇日付『東京日日新聞』に掲載された、スコット未亡人と遺児についての記事を受けてのコメントだが、黒田留学期の知己である女流彫刻家はスウェーデン出身のカロリーヌ・ベネディックス・ブルス(Caroline Benedicta Brude(五六一九三五年)で、黒田帰国後の一九〇三年には夫でカナダ人画家のウイリアムとスウェーデンへ戻つてその後の生涯を同地で送っており、探検家の未亡人であるキャスリーン・ブルス(Catherine Bruce)とは別人である。カロリーヌ・ベネディックス・ブルスについては、荒屋鋪透「グレイ―シユルローワンの黒田清輝 未完の「大きな肖像」と芸術家ブルス夫妻」(『美術研究』三六七平成九年三月)を参照。